

## アーティスト・イン・レジデンス研究会開催報告

開催日：令和2年11月29日（金）、30日（土）

開催場所：女子美術大学杉並校舎（東京都）

参加人数：約50人（両日とも）

平成28年度より継続して開催している「アーティスト・イン・レジデンス研究会」について今年度は、11月29日、30日に女子美術大学で開催しました。

今回は、参加団体が6団体に増え2日間にわたり有意義な議論ができたことと、地域で実施しているAIRについて東京で「可視化」という当初の目的は達成できたと思う。

○11月29日（金）13:00-18:00

女子美術大学 1209 教室

【アーティスト・イン・レジデンス研究会及ケース・スタディ】

（1）13:00-13:30「ジェニファー・リーを迎えて」

スピーカー | 大西昌子 / 阿部智也（益子陶芸美術館 / 陶芸メッセ・益子）

2019年の10～11月に滞在していたジェニファー・リーの受入れで学んだことと改善点について。

事前のメールのやり取りのなかで、作家とスタッフの間で言葉の捉え方にすれ違いがあった。連絡を密にし、施設や備品の手配を前もって行うことで滞在中の制作がスムーズになる。また、レジデンスという横のつながりが大切な場で、作家のプライバシーや安全をどう守るのかも課題。例として来客対応を作家個人に任せるか、制作スケジュールに影響がある場合はセーブするのかという問題がある。



（2）13:40-14:10「Y-AIR フィンランドケース」

スピーカー | 辻真木子 (遊工房アートスペース)



AIRと美術系大学による若手育成プロジェクトである「Y-AIR」として行っているフィンランドケースの紹介。「Y-AIR」では、若手にインターン、大学の授業・共同プログラム、AIR体験を提供する。Waria Art Break (フィンランド)と「天空の芸術祭」の開催地である東御市(日本)の交換プログラムでは、ワークショップやそれぞれの大学の教員同士の交流などを行い好評だった。

若手にとってレジデンスに参加することの意義とは、アウェーで自分や世界を知ることにある。「Y-AIR」実施のため、マイクロレジデンス同士が経験を共有すること、似た志をもつ施設や大学とのネットワークを強化することに引き続き取り組む。

ゲストトーク | 1209 教室

14:30-16:00 「Artist in Residency at the Shigaraki Ceramic Cultural Park (provisional)」

スピーカー | エリン・トゥルコール (陶芸家)



陶芸の森での滞在にあたって、試したい作品のスケッチや制作数を決め、目標を設定して

現地に入った。それを試したり、また薪窯など使ったことのない現地の材料や設備に触れ、滞在前の目標を変化させたりする。滞在中の技法は帰国・帰宅した後でそのまま使える訳ではないが、新しい制作のアイデアを得ることができた。

目的をもって現地に行き、それを試すとともに柔軟に変化させていくことは制作の幅を広げることになり、レジデンスの使い方として有効。

特別講演 | 7201 教室

\* 「女子美術大学国際交流文化概論 B」の授業として実施 (\* 杉並区公開講座)

16:20-17:50

「Art Networking and well being the powerful and energetic Finnish Women Artists at the Finish Artist's Colonies」

スピーカー | Dr. アンナ・マリア・ウィルヤネン (フィンランドセンター ディレクター)



アーティストコロニーは、定住のアーティストコミュニティと異なり、若手アーティストが一時的に滞在し形成される。スウェーデンのエーランド島(?)のアーティストコロニーを例に、コロニーの中での女性と家族のあり方について講義。

コロニー内の女性はアーティストであるにもかかわらず、絵画の中で「男性アーティストの側にいる女性」という描かれ方をされている。実際は、家族のサポートをしながらも自らの楽しみのため園芸や制作を行う女性、男性アーティストとほぼ同様の扱いをされていた女性など様々だった。

アーティストコロニーと AIR は、アーティストのネットワークが築かれてサポートや批評が行われ、そのことによってアート文化の高まりに繋がるという点が共通している。

18:00

## まとめ 滋賀県立陶芸の森 杉山道夫

・ケース・スタディのスピーカーは、それぞれの立場で、レジデンスに関連するお話をいただいた。益子陶芸美術館のお話は、ジェニファー・リーさんを迎えたレジデンスの現場オペレーターの立場での報告であり、遊工房アートスペースからは、プログラム全体のディレクションとして事業の総括的な報告。エリン・トゥルコールさんは陶芸の森のレジデンスに滞在した経験者として、いわばレジデンスのユーザーとしての報告。そして最後にお話しいただいたゲスト・スピーカーのアンナ・マリア・ウィルヤネンさんのトーク「Art Networking and well being the powerful and energetic Finnish Women Artists at the Finish Artist's Colonies」は、フィンランド・センターが文化政策としてのレジデンスをなぜ推進するのかという内容であった。

・陶芸の森としては今回の研究会のトークの部分でフィンランド・センターとのコラボによるレジデンス作家の受け入れをケース・スタディとして提出できたことで、陶芸の森の事業の幅の広がりを持示できた。

## ○【AIR 研究会】

11月30日(土) 10:00 - 1209 教室

テーマ | 各レジデンスの紹介、AIR の評価、課題の解決に向けた意見交換など

モデレーター | 菅野幸子 (AIR Lab アーツ・プランナー/リサーチャー)、日沼禎子 (女子美術大学教授)

スピーカー | 石澤依子 (クリエイティブレジデンシー有田)

東海林慎太郎 (アート・イニシアティブ・トウキョウ A.I.T.)



・クリエイティブレジデンシー有田の活動内容とそれをフォローしたAITの活動について紹介があった。双方の組織の持っている強みを生かし相乗効果が上がるような事業の枠組みを作っている。

益子陶芸美術館/陶芸メッセ・益子 大西昌子



- ・ 2020 年のリーチ工房創設 100 周年記念の企画の準備について。
- ・ 今年度の滞在作家のイリーナ、ジェニファーの活動について。

#### 京都市芸術センター 勝谷真美



- ・ シドニーのアートスペースとの交換プログラムについて  
アーティストがやりたいことが派遣先の環境ではできないということがあった。派遣先とパートナーシップを結ぶ前に、現地に行きプログラムとアーティストのマッチングを確認することの必要性を再認識した。また、コーディネーターの育成も課題。
- ・ 受入れを決める際に、年齢や性別など属性に多様性をもたせることも重要ではないか。

#### 瀬戸市新世紀工芸館 ペ・スジョン／屋我優人



- ・瀬戸市新世紀工芸館では、2年ほど通いながら学んでいる研修生がおり、研修生とレジデンス受入れ作家のスタジオの共同使用が、双方の折合いやスペースの面で課題となっている。
- ・今年度の受入れ作家について、様々な経歴をもった作家の受入れや分野を超える交流はいい刺激になる。

#### 滋賀県立陶芸の森 安藤祐輝



- ・宇部で「見える人には見える、見えない人には見えない」野外展示を視察した。この展示は陶芸の森で課題となっている、作家滞在後の作品の保管・管理の課題解決のヒントとなる取組み。このように、内部で解決しないことは外部を参考にしたり相談したりすることで解決の糸口が見えることもある。
- ・スタジオはオープンスペースのため真似たり真似されたりする。「あの人の作品を作りたい

い」と言われたときにそのままそっくり技術を教えていいのか、それは教えられた人のためになるのかという問題提起。

## 2) 研究会 13:00 – 15:30

### 「中国景德鎮のアーティスト・イン・レジデンスの現状について」 杉山道夫

・最近中国に招かれることが多いことから、中国、特に景德鎮での AIR4 か所を中心に、中国各地の陶芸関係のレジデンスの特徴、将来性などを報告。情報は、近年中国のレジデンスに招かれた陶芸の森の AIR の OB から入手した。(杉山)

### 「文化庁 AIR 共同研究・調査状況について」 日沼禎子



・各施設へのアンケート結果からレジデンス運営の現状を概観した。スタッフは正規で雇用されているものが 13%、ボランティアが 60%ほどで固定したスタッフがおらず、また経費も半数以上が 500 万円以下と小規模の事業が多いといえる。

・持続可能なレジデンスの運営のためには、安定した財源やスタッフの確保が不可欠であり、補助金を受けるため成果の評価軸を明確にする必要がある。近年は地域創造を目指した芸術祭なども企画されており、作り手の成果と地域に対する成果をはかること、作り手と地域をつなぐ人材を育てることも必要。

### 「評価指標づくりなどについての意見交換」 菅野幸子



ワークショップ



・文化事業の補助金を受けるため不可欠な評価だが、評価軸が不明確で現状では補助を受けたらそこで終わりという一方向的に感じられる。本来評価とは、分析し改善につなげるためのサイクルであり、評価をする側、受ける側の途中のコミュニケーションが必要である。成果の評価指標はどのようなものが望ましいか2つのグループに分かれて意見交換した。

(意見抜粋)

- ・ 評価の回数や視点を増やす。
- ・ どこからみるかによって評価が変わる。
- ・ 行政から、作家から、学芸員から、地域住民からなどいろいろな立場の人から評価されることがあるが、それを受けとめまとめる責任者がいない。
- ・ 強みは自分たちが一番理解している。評価前にアンケートなどの準備を行い、強みをデータで表すにはどうすればいいか考えておく。
- ・ 定量データと、エピソードなどの定性データを組合せ評価軸をつくる。
- ・ 補助がその団体・作家の成長にどうつながったかという視点が大切。

AIR や各団体の強みを発信していくことが大切。評価というのは受け身なものではなく、自分たちの活動を見直しより良いものにしていく能動的なプロセスだと考える。

## ●まとめ

### ・参加組織の拡大

今回の研究会では、新しくアート・イニシアティブ・トウキョウ A.I.T、クリエイティブレジデンシー有田にも加わった。AIT は、レジデンス実施の際の調整機関としての役割を地域、作家、行政の間で行うことを主な業務にしている NPO 法人であり、クリエイティブレジデンシー有田は、有田という産地を強く意識した実行委員会組織である。当研究会としては、陶器を中心とした工芸産地でレジデンスを運営している組織を中心に今後も声かけをしていくつもりである。

課題の確認とその対処について、また評価軸をどうするのかといった内容を議論できたのは、有意義だった。

二日目の議論を終えて、「まだ話足りない」という声を聞くことができた。そのことが、この研究会の成果だと考える。

### ・研究会の目指す方向性

参加組織は、アーティスト、地域などその周囲にいる人々と調整を行い事業をおこなっていき、参画者にメリットをもたらすというのがレジデンス事業の流れであるが、この研究会は、レジデンス事業の運営サイドに知恵と力を与えてくれるものでなければならない。